# 東ドイツ（ドイツ民主共和国）の図書館

安井羊朔（法学部・教授）

Bibliothek, Rokokosaal

わたくしは、昭和６０年度の在外研究員として４月２日に東ドイツのワイマルに入り、９月末までこの町に住んで、ドイツ古典文学研究所で研究を続けることになった。この研究所の一機関に、ドイツ古典文学中央図書館がある。

町の「民主主義広場」をとりまく古い建物のなかでは、この図書館の建物が最も古く、その歴史は、１６世紀にさかのぼる。最初は、1565年に、ヨハン・ウィルヘルム公の居城として建てられたが、１７６６年に図書館に改築され、その後、ゲーテ自身が１７９７年に同図書館の管理を引き受けて以来、彼の精力的な努力によって蔵書数は急増し、１９６９年以来、この歴史的な図書館は、この研究所のドイツ古典文学中央図書館となり、現在に及んでいる。

４月８日にわたくしは、これから半年間利用させてもらう図書館を、研究所の副総裁ザイフェルト博士に案内してもらった。

手写本（Buchhandschriften）は、およそ３０００部が所蔵されている。最古のものは９５０年頃に書かれた福音書奉読集の断片である。また、１３４０年から１３５０年頃には、いわゆる手写本（Biblia pauperum）が多数現われたが、この種の古文書で 東ドイツ最古のものが、ここワイマルの図書館で見られる。Biblia pauperum は、特に無学な人のための啓蒙書として書かれた、中世の絵解聖書である。

貴重本（Inkunabeln）は、およそ５００冊所蔵。１４５０年から１５００年までに出版された珍本で、印刷術が発明された頃のもの。

啓蒙主義、古典主義、浪漫主義文学の文献は圧巻である。中心は何といってもゲーテの著作で、１７７５年から現代の新版までが、発行年次順に並んでいる。著作の翻訳は、外国語のアルファベット順に、アルメニア語（Armeni-

sch）からハンガリー語（Ungarisch）まで、きちんと書架に並べられている。さらに、ワイマルにゆかりのあるシラー、ヘルダー、ウィーラントの著作および参考文献も豊富である。

この図書館は、世界中の研究者に門戸を開放している。ワイマル滞在中、わたくしは幾度も足を運んだが　館員は極めて親切で、不快な思いをしたことは一度もなかった。不便な点といえば、(A)カタログ閲覧、(B)借り出し、(C)読書室利用、それぞれの時間帯がまちまちであったことだ。月曜日から金曜日までは、(A)9:00－12:30、14:00－17:30、(B) 11:00－12:30、15:00－17:30、(C)9:00－12:30、14:00－18:00 といった具合である。しかし他の遠方の図書館（社会主義圏内の国々の図書館も含む）にある文献を、ワイマルの図書館で借用、閲覧できる制度は、すばらしいものだと思った。日本でも昨年１０月から早慶両大学間に早慶図書館協力なるものが開始されたことを、わたくしは「ふみくら」で知ったが、これは、わが早稲田大学図書館が、開かれたシステムの追求に乗りだしたひとつのあらわれで、図書館利用者にとっては、まことに嬉しい限りである。

Platz der Demokratie von Süden
mit Blick zum Schloß

# スウェーデンの図書館

スウェーデン人にとって深刻な問題の一つは、寒くて、長くて、暗い冬をどう過ごすかである。よほどの愛国者でもこの寒・長・暗の冬については不満を漏らす。テレビは国営の二つの局があまりおもしろくない番組を主に夕方放送するだけだし職場の同僚と毎日飲み歩く習慣などもない。海外旅行や週末のホーム・パーティとかダンス・レストランなら時間も潰せようが、高負担・高福祉政策で可処分所得が少ないため、頻繁にという訳にはいかない。日本の約1.4倍もある国土面積に僅か８３０万の住民がバラバラに住んでいる国で寒・長・暗の冬を過ごすには忍耐力と本がどうしても必要である。スウェーデンは非常に整備された図書館システムを持つ国として有名であるが、その背後にはこうした環境条件があるのかもしれない。

ストックホルムの中心街にある王立図書館を頂点にして＜研究図書館＞が全国で５８（総合大学図書館が１０、王立工科大学図書館などの専門別大学図書館が６、中央統計局図書館のような特別研究図書館が３４、企業の研究図書館が8）、一般市民を主たる対象にした＜国民図書館＞が全国に４００（地方政治の最小の単位であるコミューンが２８４あり、各コミューンに一つの図書館がある。またその上の行政単位である県にもそれぞれの図書館がある）。１９８３年現在で、４５８の図書館が整備された全国図書館システムの基幹マシーンとなっている。

スウェーデンの図書館を利用して気付いたことがいくつかある。

(1)　レファレンス・ワークの充実――豊富なスタッフと教育・訓練の徹底の賜であろうが、提供されるサービスは質・量共に小気味良い。（コピーの高さには閉口するが）、ストックホルム市立図書館には日本語の蔵書リストまで用意されている。

岡沢　憲芙（社会科学部・教授）

ストックホルム大学図書館

王立図書館

STOCKHOLMS STADSBIBLIOTEK
LÅNEKORT NR 8 6 7 0 1 4

Namn Norio Okazawa
Gatuadress Docentbacken 3 3tr.
Postnr Ort 104 05 Stockholm
Tel 15 28 01
Personnr 440712-5873

Omstämplas efter år 85
Tag med kortet vid varje lånetillfälle!
OBS Anmäl namn och adressändring!
Kortet gäller vid alla enheter inom stadsbiblioteket

(2)　開放性――「知識と情報を愛し、それを必要とする」すべての世界市民に、原則として、開放されている。入館手続、閲覧・貸出し手続きは簡単である。外国人にも即座に貸出しカードを交付してくれる。<開かれた社会>の精神は図書館行政でも生かされている。

(3)　市民生活との密着――特に、コミューン図書館は読書の場であるだけでなく、集会場であり、市民の文化サロンであり、地方芸術活動の拠点となっている。図書館バスの活用も盛んで、人口の少ない地方に住んでいるため図書館にアクセスし難い市民のためばかりでなく団地などの住宅地も大型バスで回っている。また、老人の家の図書館も印象的であった。福祉施設の充実については定評があるが、老人の家に設置された図書室の明るさと充実度は、日本の一般的現実と対比すれば思わず感動・絶句してしまうほどである。

(4)　空間の快適さ――利用者を寄せ付けぬような権威主義的雰囲気と荘重感、これが伝統的な図書館であるとすれば、最近の図書館は気軽さと明るさを強調しているようである。その代表的な例がストックホルム大学図書館である。校舎は工場のような無粋で使い難い設計で、教職員の批判と冗談の対象になっているが、この図書館は評判が良い。明るくて使い易い。なによりも、そこに居ることが楽しい。トイレと家具、喫茶・軽食施設の水準が一定のレベルに達していなければ、長時間滞在の住空間・読書空間としての図書館は利用者に受け入れられないのではないだろうか。「楽しくなければ図書館でない！？」

# カナダ・マギル大学の図書館

菊池徹夫（文学部・教授）

私は1985年3月から約半年間、在外研究で主にカナダのモントリオールで過した。マギル大学の人類学部教授で東アジア研究所の所長でもある井川史子女史のお世話になりながら、北米や北方諸地域の歴史・考古・民族誌などの勉強をしようという心算であった。

トロントが英系文化の中心であるのに対し、モントリオールはカナダで唯一、仏系のケベック州の中心で、街には英・仏両語のほか世界中の言語が飛びかっていた。交通標識からスーパーのチラシまですべて英・仏両語併記である。

街のまん中にあるマギル大学で、私は人文・社会科学系のマクレナン図書館と、北方関係文献コレクションとしては世界屈指の"Northern Studies Collections"（現在は自然科学・工学系図書館に併置）とをよく利用した。

この二つのほかキャンパス内には、建築・美術、動物・鳥類学、植物学、歯科学、教育学、経営学、イスラム学、法学、図書館学、農学、地図と航空写真、音楽学、数学、医学、気象学、看護学・社会事業、海洋学、医学史、体育学、宗教学、物理学の専門図書館、それに学部生のための図書館がある。

マクレナン図書館についていえば、1階のレファレンス・ルームまでは学外者でもだれでも自由に出入りできる。ここには著者・書名・テーマ別に分類されたカード、マイクロカタログそれに各分野別の基本参考図書が完備され、複数国語の話せる、reference librarians が親切に相談にのってくれる。

そこから各自IDカードを見せて入り、2階以上の完全開架式図書室へは2台のエレベーターがある。地階は貴重本室だ。人類学は3階、考古・歴史・民族誌関係は4階にある。定期刊行物の新刊分は2階の広いスペースに、誌名のアルファベット順で世界中の主な雑誌が平積みで並んでいる。

各階とも、書架の周囲には明るい窓際に書棚のついた机やテーブルがぐるりと並んでいる。院生は登録のうえそこに自分の席を持ち当面使用する本を置いておくことができる。各階ごとに2台づつ、雑誌室と1階の参考室にはさらに1台づつのコイン式複写機がある。コピー1枚5セント（当時で約9円）で利用に当って時間や枚数の制限はない。利用した本は絶対に自分で元の書架へ戻さず、何冊でも利用した場所の棚やデスクの上にそのまま放置するシステムである。

すべての本は磁気処理されていて、借出す時消磁して渡される。無断で持ち出そうものならゲートのブザーが鳴り響き回転バーが動かない仕組みである。入館時のノーチェックもこのためである。街の本屋の多くもこうであった。

1ケ月間の貸出期間を1日でも過ぎると警告書が郵送され、反則金6ドルをとられる。ドライなものだ。これも一つの行き方であろう。夏休み以外は夜11時まで、日曜日でも夜10時まで開館していた。

さて、"Northern Studies Collections"にも、カナダ一を誇るトロント大学図書館にも、それはそれは美しいオタワの国会図書館についてもふれたかったのだが、与えられた紙数はつきた。機をあらためることとしよう。

McGILL
UNIVERSITY
LIBRARIES